第２章　首里城公園の施設

第２章　首里城公園の施設

2-1. 首里城公園の施設の概要、設備及び管理の状況

（1）首里城公園の概要

首里城公園の概要として首里城公園の名称等、首里城公園の整備の基本方針、首里城公園の位置、沿革、首里城公園内で発生した自然災害と人為災害を整理し、表に示す。

1）首里城公園の名称、面積、整備年

首里城公園は国営沖縄記念公園首里城地区と県営首里城公園で構成されている。首里城跡とそのまわりの施設を含む 17.8ha が公園区域となっている。

国営沖縄記念公園には、昭和 50 年に沖縄本島北部で開催された沖縄国際海洋博覧会跡地に作られた「海洋博覧会地区」と、沖縄の復帰を記念する事業の一環として首里城跡地を整備することになった「首里城地区」がある。首里城地区は、城郭内側の首里城跡地約 4.7ha の範囲となっており、御庭（うなー）という広場を中心に正殿をはじめとした建築物や城壁、各門が往時の姿で復元されている。さらに園路・広場、植栽なども復元・整備されている。

県営首里城公園は城郭外側の区域約 13.1ha の範囲となっており、首里杜館（すいむいかん）、龍潭（りゅうたん）、駐車場などの施設が整備されている。

首里城公園は沖縄の歴史・文化の中心にある首里城及びその外苑を公園として整備することで地域住民の利用はもとより沖縄観光の拠点となっている。

	国営区域	県営区域
名　　称	国営沖縄記念公園 首里城地区	県営首里城公園
位　　置	沖縄県那覇市首里当蔵町・首里金城町	
面　　積	4.7ha（開園面積 4.7ha）	13.1ha（開園面積 7.21ha）
	合計　17.8ha（開園面積 11.42ha）	
着手年度	昭和 61 年度	昭和 62 年度（事業認可）
供用開始	平成 4 年度	平成 4 年度

表 2.1：首里城公園の概要（令和元年度事業概要 国営沖縄記念公園首里城地区 首里城公園をもとに作成）

2）首里城公園の整備の基本方針

首里城公園の整備の基本方針は以下の 4 点である。

1	首里杜構想との整合性及び首里城の歴史的風致に配慮した施設配置計画を行う
2	歴史・文化の拠点として魅力ある施設整備を図る
3	将来に向かって沖縄の歴史・文化の拠点となるよう多様な活用を図る
4	文化遺産の鑑賞、見学、体験をいう観光形態の充実を目指す

表 2.2：首里城公園の整備の基本方針（令和元年度事業概要 国営沖縄記念公園首里城地区 首里城公園をもとに作成）

３）首里城公園の位置

首里城公園は沖縄県那覇市東部の緩やかな丘陵地、標高約 127ｍの高台に立地し、那覇市中心部にある沖縄県庁舎から東へ約 4km のところに位置する。北に真嘉比川、南に金城川があり、地形は西方の東シナ海に向かって緩やかに傾斜している。

図 2.1：首里城公園位置図（出典：国営沖縄記念公園首里城地区　建設の記録）

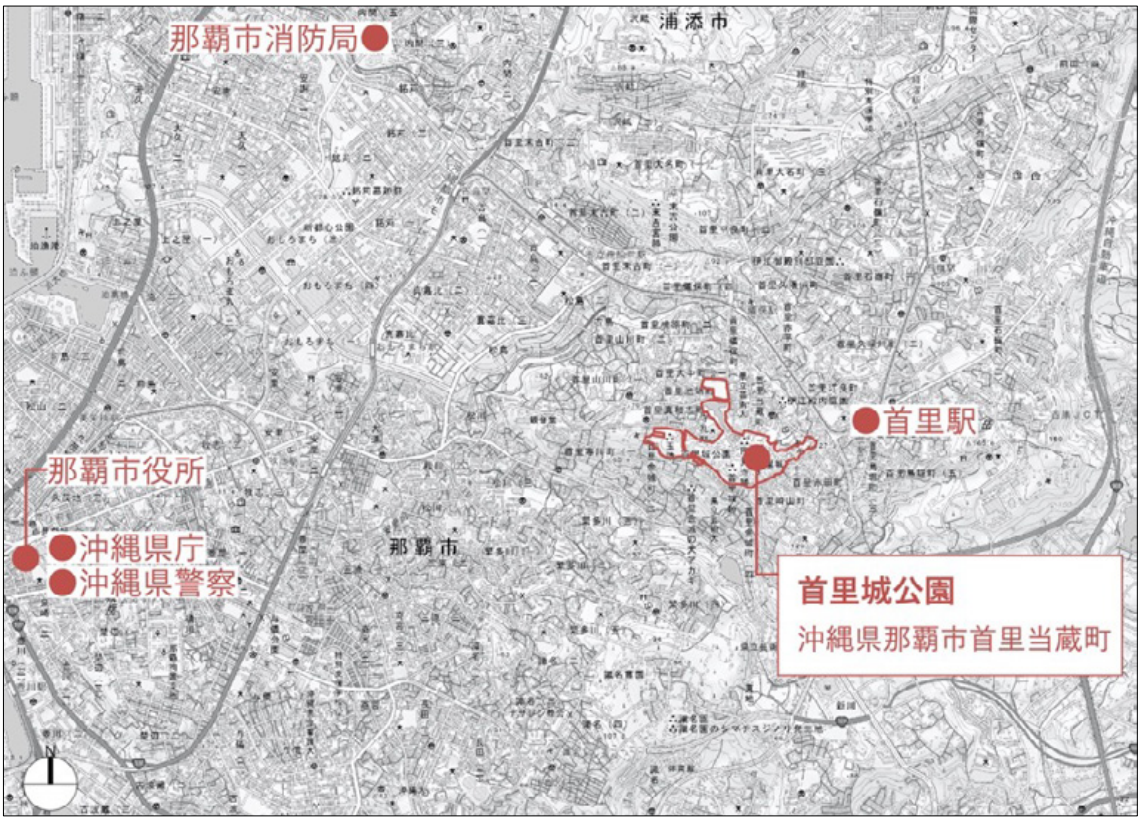


図 2.2：首里城公園位置図　（国土地理院 1/25000 地図に加筆して作成）

４）首里城公園の沿革

首里城の創建年については諸説があり定かでない。沖縄最古の碑文「安国山樹華木記」（1427年）には、城の北側に人口池「龍潭」を掘り、周りに花木を植えたと記されており、すでにこの時期には城を含めたこの一帯が整備されていたと考えられる。２年後に尚巴志が統一王朝を樹立したことで、首里城は唯一の国王とその家族の住む城となり、王朝文化や政治の中心として存在することになった。

1453 年、王位をめぐる争いから首里城は全焼した。その後、尚真王代には城の北側に城郭を築いて歓会門と久慶門を建造し、正殿には石高欄と大龍柱を設置した。城の周辺も大幅に整備された。さらに、次の尚清王代（在位 1527～1555 年）には城の南側に城郭を築き継世門を設けた。

1660 年、首里城は失火により全焼し、再建されたのは 1671 年であった。さらに 1706 年、正殿をはじめ北殿、南殿などの建築物を焼失したが、薩摩から材木を入手して 1712 年に再建し、1715 年までにはほとんどの建築物が再建された。

1923 年（大正 12 年）、時の首里市は老朽化著しい正殿の取り壊しを決議したが、これを新聞で知った鎌倉芳太郎と伊東忠太が中止を訴え、取り壊しは避けられた。そして２年後の 1925 年（大正 14 年）に正殿は特別保護建造物に指定され（のちに旧国宝）、1928～33 年（昭和 3～8 年）に本格的に修理された。

第二次世界大戦では、首里城跡の地下に旧日本陸軍（第 32 軍）が陣地を構えていたため、米軍の攻撃目標になり、建築物や城壁、さらに周辺の文化財建造物も破壊され、首里の歴史的町並みはほとんど失われてしまった。戦後である 1973 年（昭和 48）に「首里城復元期成会」が結成され、戦後文化財復元事業の一環として、1974 年（昭和 49 年）に歓会門とその接続石積みが復元された。また 1983 年（昭和 58 年）には久慶門とその接続石積が復元された。1984 年（昭和 59 年）に沖縄県が「首里城公園基本計画」を策定して「首里杜構想」を公表し、首里城公園はその中核をなすものとして約 18ha を歴史的公園として保全、整備を図ることが基本構想に掲げられていた。1986 年（昭和 61 年）、沖縄復帰記念事業として首里城跡地約 4ha を「国営沖縄記念公園首里城地区」として整備することが閣議で決定され、その後、国営公園の周囲を県営公園として整備することが沖縄県で決定された。

首里城復元の最も重要な意義の一つとして正殿の復元、整備があり、1985 年（昭和 60 年）の基礎調査ののち、1989 年（平成元年）に実施設計が完了し、1992 年（平成 4 年）10 月末に正殿等の復元工事が完了し、同年 11 月 3 日に一部開園となった。

このように首里城は過去 4 回焼失しており、その度に再建してきた。5 回目の火災となった 2019 年（令和元年）の首里城火災では首里城正殿を含む建築物 8 棟と施設内に展示・収蔵されていた文化財の多くが焼失した。政府により首里城復元に向けた基本的な方針、首里城正殿等復元に向けた工程表が決定され、復元に向けた取組が進められている。

年代		内容
1429	第１期	琉球王国成立　首里城内郭は第一尚氏王朝（1429～69）の創建と推定
1453		「志魯（しろ）・布里（ふり）の乱」が起こり首里城全焼
?	第２期	再建年不明
1660		９月　首里城に火災が起り、正殿その他が焼け、王は大美御殿に移居
1671	第３期	２月　再建
1709		11 月　首里城に火災が起り、正殿・南殿・北殿等が焼失
1712	第４期	再建（完成は 1715 年）
1925		大正 14　正殿が国宝に指定
1928		昭和３　正殿の大改修（昭和の大改修）
1933		昭和８　歓会門、瑞泉門、白銀門、守礼門が国宝に指定
1945		昭和 20　沖縄戦にて焼失
1972	昭和 47 年	沖縄県の日本本土復帰
1973	昭和 48 年	首里城復元期成会が結成
1984	昭和 59 年	沖縄県により「首里城公園基本計画」が策定
1986	昭和 61 年	沖縄県により「首里城公園整備計画調査」が策定
1987	昭和 62 年	首里城公園の内の国営公園部分、県営公園部分が都市計画事業承認
		沖縄県により「首里城公園基本設計」が策定
1989	平成元年	正殿等の工事が着手
1992	平成４年	正殿、北殿、南殿・番所、奉神門、広福門、瑞泉門、漏刻門が竣工、開園
2000	平成 12 年	７月　九州・沖縄サミット開催　12 月　首里城跡が世界遺産に登録
2019	平成 31 年	２月　正殿等の管理運営を国から許可を受け、県が正殿等の管理を開始
	令和元年	10 月　火災により正殿等が焼失

表 2.3：首里城公園の沿革

（令和２年度事業概要 国営沖縄記念公園 首里城地区 首里城公園をもとに作成）

５）自然災害

首里城公園における過去５年の自然災害の状況は、下表のとおりである。

台風及び突風被害は９回、落雷は２回である。2017 年９月３日の落雷では防災・防犯設備が被害を受け、2016 年７月 30 日の落雷では監視カメラ数台が被害を受けているが、被災後に UR と美ら島財団が修繕を行っている。台風及び突風における防災・防犯設備への被害は、これまでのところ発生していない。

NO.	区分	年月日	内容	被害	対応
1	台風	2019(R1) 11/22	台風 27 号	・北殿の瓦落下（火災後の破損瓦）	
2	台風	2019(R1) 9/21	台風 17 号	・京の内枝折れ、落葉散乱、飛散したプランターで近隣住民の車両を損傷。	・落葉等清掃、被害住民へお詫び ・車両損傷は保険対応
3	台風	2018(H30) 6/16	台風６号	・龍潭で枝折れ	・枝撤去
4	台風	2018(H30) /7/2	台風７号	・園路で枝折れ、北殿入口・正殿裏１Ｆに浸水、龍潭の冠水	・折れ枝撤去、浸水等清掃
5	台風	2018(H30) 9/28	台風 24 号	・正殿北側仮設足場（漆塗装業務）の一部傾倒。 ・奥書院アクリル戸損傷 ・継世門霧除け破損 ・本設店舗裏倒木および瓦・木塀破損 ・上の毛公園倒木および東屋屋根破損 ・園内折れ枝および落葉、系図座西側・京の内・１３北城郭・銭蔵周辺で植栽の倒木	・台風通過後 9/30 に通常開園したが、足場撤去の為、開館時間は 11：45 に変更。 ・奥書院アクリル応急対応 ・継世門霧除け（県文化財課へ報告と修繕依頼） ・本設店舗瓦、上の毛公園東屋屋根修繕 ・倒木立て起こし、園内折れ枝および落葉等清掃対応
6	台風	2018(H30) 10/5	台風 25 号	・正殿(3 階雨戸外れ)・奥書院(扉・雨戸外れ)・北殿で浸水	・雨戸・扉戻し、浸水は清掃対応
7	突風	2018(H30) 8/26	下之御庭にて舞への誘いテントが突風に煽られ、けが人発生	・軽傷(打撲のみ)	・固定重り追加、現場の風状況でテント撤去を実施
8	台風	2017(H29) 10/30	台風 22 号	・瑞泉門霧除け破損、京の内・首里森御嶽・龍潭トイレ・継世門・玉陵入口に植栽の幹・枝折れ、大枝落下によるスロープ破損	・瑞泉門霧除け（県文化財課へ報告） ・枝折れ等撤去、スロープ仮補修
9	雷	2017(H29) 9/3	落雷 （奉神門周辺）	・自動火災報知機、監視カメラ、中央監視設備、直流電源設備、昇降機、大型映像設備の故障および不良	・自動火災報知機、監視カメラ、中央監視設備、直流電源設備を修繕（国エリア除く） ・監視カメラ（国エリア）、昇降機、大型映像設備を修繕
10	雷	2016(H28) 7/30	首里城周辺での落雷	・電話、FAX、監視カメラ数台の一時停止	・維持管理業務で復旧
11	台風	2016(H27) 7/10	台風９号	・広福門木柵破損・継世門屋根漆喰剥離・右掖門扉亀裂	・広福門・右掖門を修繕 ・継世門（県文化財課へ報告）

表 2.4：過去５年の自然災害（台風、地震、雷）の記録および被害状況

（沖縄美ら島財団提供資料 天災・人災記録および被害状況をもとに作成）

６）人為災害

首里城公園における過去５年の人為災害（実害がなかったものも含む）の状況は、下表のとおりである。

火災は３回だが、いずれも城郭外（上の毛公園）で発生し、小火で収まっている。2017 年 10 月 19 日、2015 年 12 月 20 日の２回は警備員が現地で実際に消火活動を行っている。

NO.	区分	年月日	内容	被害	対応
1	不審行動	2020(R2)/2/23	上の毛公園で男性３～４名がタバコのようなものを吸い回している様子を監視カメラで確認し警察へ情報提供	・なし	・2/23 モニターで吸い廻しを確認した警備員が遠隔で放送チャイムを鳴らしたところ、当該者は公園を離れた。翌日、報告を受けた職員が現場にてたばこを回収し警察へ引き渡した。 ・2/28 モニターで吸い廻しを確認した警備員が警察へ通報した。
2	窃盗	2017(H29)/11/20	深夜に男性 2 名が上の毛公園の自販機から窃盗	・清涼飲料水３本	・警備員が監視カメラ確認後警察に通報 30 分後に警察により身柄確保
3	小火	2017(H29)/10/19	小火発生。上の毛公園路階段で中学生 7～8 名が何かを燃やしているのを発見。	・なし	・監視カメラで発見した警備員が現地へ急行し小火を消火。 ・再発防止のため禁止行為看板を設置し、抑止策として当該場所に監視カメラの設置を行った。
4	小火	2017(H29)/9/28	小火発生。上の毛公園路階段の３か所に燃えカス乱。（一般利用者からの目撃情報によると中学生３名）	・なし	・警察へ通報し捜査に協力した（監視カメラ映像を提供）。
5	液体付着	2017(H29)/4/14	警備員が巡回中に液体付着を発見。	・奉神門トイレ、下之御庭、 ・券売所、広福門	・通常巡回に加え巡視を強化 ・東京文化財研究所に実験・調査を依頼。除去方法および再発した場合の応急処置方法等について指導受けた。 ・財団による除去実験後洗浄した。
6	液体付着	2017(H29)/4/3	警備員が巡回中に液体付着を発見。	・守礼門、瑞泉門、漏刻門、万国津梁の鐘	・同上
7	落書き	2016(H28)/2/27	警備員が巡回中に青色マジックで６か所の落書きを発見。	・弁財天堂	・通常巡視に加え巡視を強化 ・県文化財課へ報告と修繕依頼
8	小火	2015(H27)/12/20	警備員が巡回中に上の毛公園東屋近くで小火を発見(目撃情報なし)	・ソテツ１株	・警備員が消火 ・巡視強化・抑止策として監視カメラを設置した
9	車両事故	2015(H27)/12/9	龍潭でブレーキとアクセルを間違え、池に転落。(20 代女性、命に別状なし)	・フェンス 6m 及び石積の損壊	・当日で仮フェンス設置

表 2.5：過去５年の人為災害の記録および被害状況

（沖縄美ら島財団提供資料 天災・人災記録および被害状況をもとに作成）

（２）首里城公園内の施設の概要

首里城公園内の施設の概要として、首里城公園内の区域、城郭内外の施設の概要、利用動線及び管理動線について整理し、図に示す。

１）首里城公園内の区域

首里城公園の管理区域は、①城郭内にある国営公園の有料区域（以下「城郭内有料区域」という。）、②城郭内にある国営公園の無料区域（以下「城郭内無料区域」という。）、及び③城郭外の県営都市公園区域（以下「城郭外区域」という。）の大きく３つの区域に分類される。区域の場所・範囲等は以下の図面のとおりである。

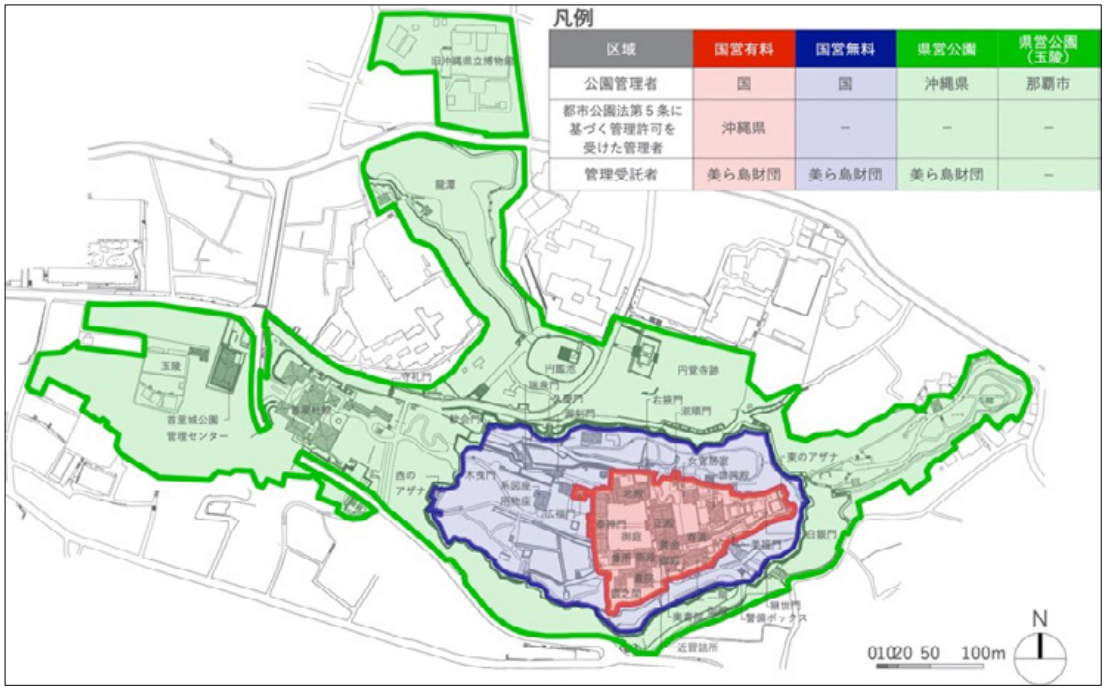


図 2.3：首里城公園内の管理区分（沖縄美ら島財団提供資料　令和元年度　首里城公園管理区分図を参考に作成）

２）城郭内外の建築物等の概要

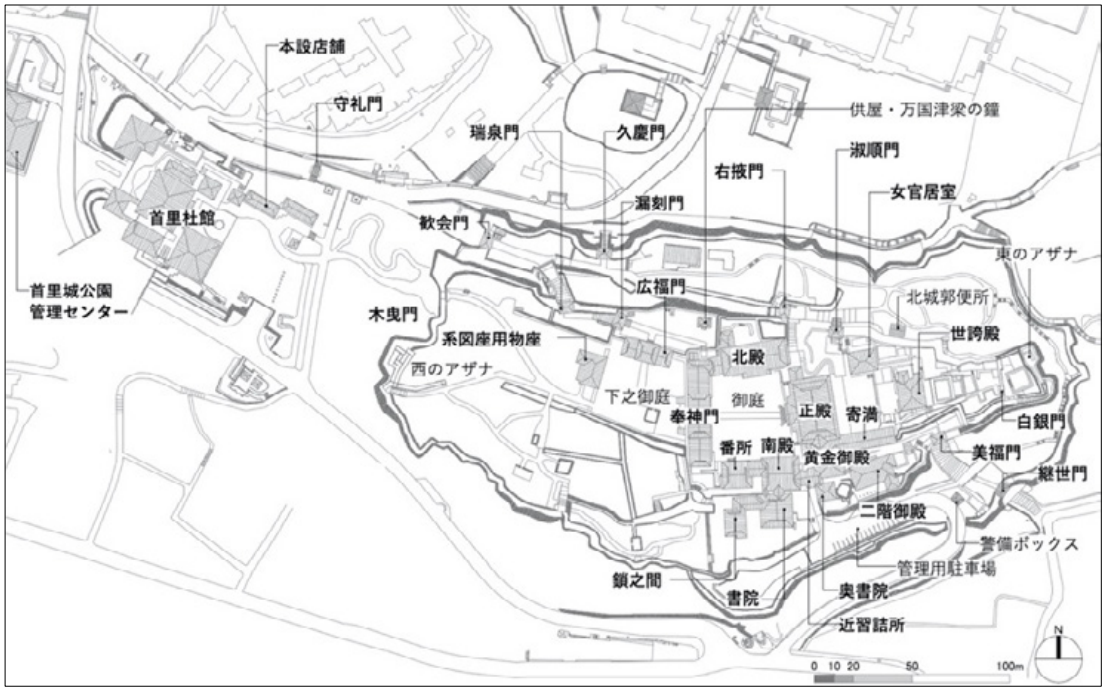


図 2.4：首里城公園内の建築物等の配置図

首里城公園内の建築物等の配置は図 2.4 のとおりであり、名称、構造階数、建築面積、延べ面積、供用年、復元タイプ、被害状況などは、下表のとおりである。

首里城火災前の城郭内有料区域には正殿を含む 11 棟の建築物があり、そのうち 3 棟は木造、3 棟は鉄筋コンクリート造、4 棟は木造と鉄筋コンクリート造の混構造、1 棟は鉄骨造であった。そのうち正殿（せいでん）、北殿（ほくでん）、南殿（なんでん）・番所（ばんどころ）、書院・鎖之間（さすのま）、黄金御殿（くがにうどぅん）・寄満（ゆいんち）・近習詰所（きんじゅうつめしょ）・奥書院、二階御殿（にーけーうどぅん）の 6 棟が全焼し、奉神門、女官居室の 2 棟が部分焼となった。

区域	分類	施設名	構造階数	建築面積（㎡）	延べ面積（㎡）	供用年	復元タイプ	被害
城郭内有料区域	建築	正殿	W 造地上 3 階	702.75	1,270.04	1992 年	復元※1	全焼
	建築	北殿	RC 造地上 1 階	538.72	473.58	1992 年	外観復元	全焼
	建築	南殿・番所	RC 造地上 2 階	448.46	608.94	1992 年	外観復元	全焼
	建築	奉神門	RC 造地上 2 階	502.07	513.47	1992 年	外観復元	部分焼
	建築	広福門	W 造一部 RC 造 地上 1 階一部 2 階	166.28	156.26	1992 年	外観復元	—
	建築	二階御殿	W＋RC 造 地上 2 階	268.64	603.00	2000 年	準復元（2 階） 外観復元　（1 階）	全焼
	建築	書院 ・鎖之間	W＋RC 造 地上 1 階地下 1 階	440.33	620.82	2007 年	準復元	全焼
	建築	黄金御殿 ・寄満 ・近習詰所 ・奥書院	W＋RC 造 地上 2 階	668.23	1,048.65	2014 年	外観復元 （黄金御殿・近習詰所） 外観想定復元（寄満） 準復元（奥書院）	全焼
	建築	女官居室	S 造地上 2 階	123.39	188.11	2019 年	外観再現	部分焼
	建築	世誇殿	W 造地上 1 階	183.47	183.47	2019 年	外観復元	—
	門	淑順門	—	—	—	2010 年	復元	—
	門	白銀門	—	—	—	2019 年	—	—
	門	美福門	—	—	—	2019 年	外観想定復元	—
				4,042.34	5,666.34			
城郭内無料区域	建築	系図座 ・用物座	W 造地上 1 階	206.59	187.58	2000 年	外観想定復元	—
	建築	北城郭便所	W 造地上 1 階	0.00	0.00	2017 年	—	—
	門	瑞泉門	—	—	—	1992 年	復元	—
	門	漏刻門	—	—	—	1992 年	復元	—
	門	右掖門	—	—	—	2000 年	復元	—
	他	供屋	W 造地上 1 階	19.83	19.83	2000 年	外観再現	—
				226.42	207.41			
城郭外区域	建築	首里杜館	RC 造一部 SRC 造地下 3 階地上 1 階	5,260.37	12,066.67	1992 年	—	—
	建築	本設店舗	W 造地上 1 階	172.29	111.16	2001 年	—	
	建築	首里城公園管理センター管理棟	RC 造地上 1 階	656.28	565.38	1998 年	—	—
	門	守礼門	—	—	—	1958 年	—	—
	門	歓会門	—	—	—	1974 年	—	—
	門	久慶門	—	—	—	1983 年	—	—
	門	木曳門	—	—	—	1992 年	—	—
	門	継世門	—	—	—	2005 年	—	—
				6,088.94	12,743.21			

※W 造：木造、RC 造：鉄筋コンクリート造、SRC 造：鉄骨鉄筋コンクリート造、S 造：鉄骨造
※1 正殿は遺構、図面、古写真、配置図、事例、聞き取りの成果等の根拠資料に基づいて、往時の材料・工法でより精度を上げて内外部とも復元した建築物。

表 2.6：城郭内外の施設一覧表（各建築物竣工図・首里城公園 HP をもとに作成）

３）利用動線

首里城公園の利用動線は城郭内外が一体となって計画されており、健常者の利用動線は守礼門・歓会門から城郭内を廻り久慶門から戻るルートが設定されている。身障者の利用動線は、首里杜館から木曳門をとおり城郭内を廻るルートが設定されているが、これらは災害時にはバリアフリーの避難誘導経路となる。

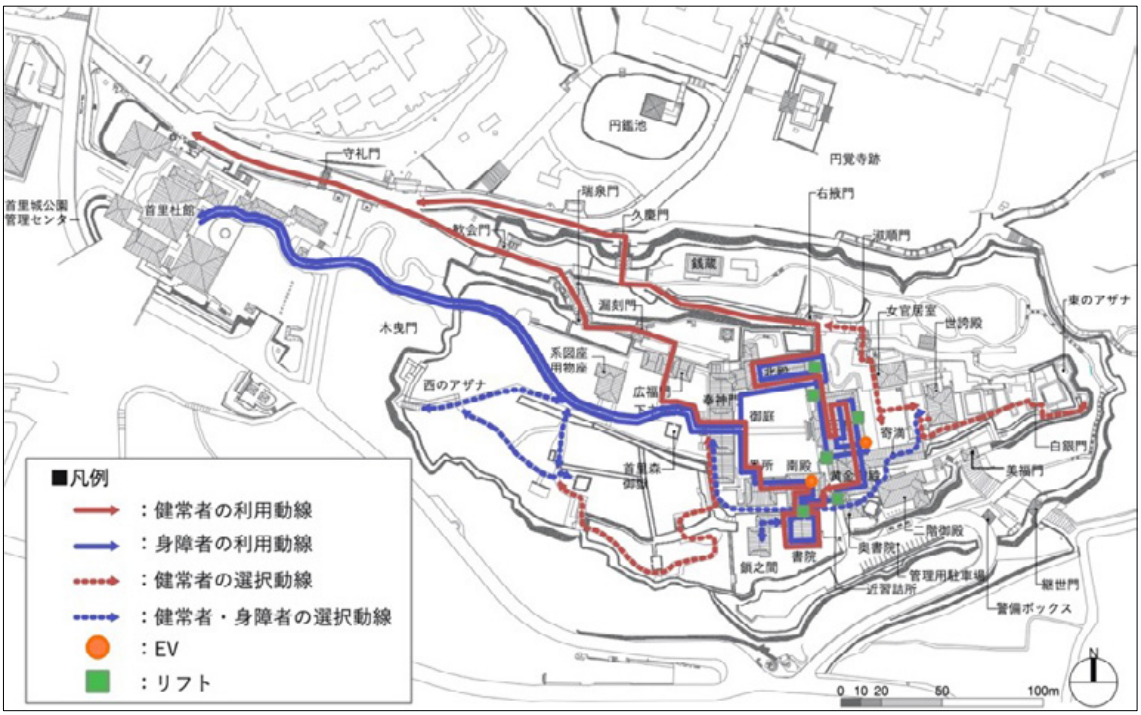
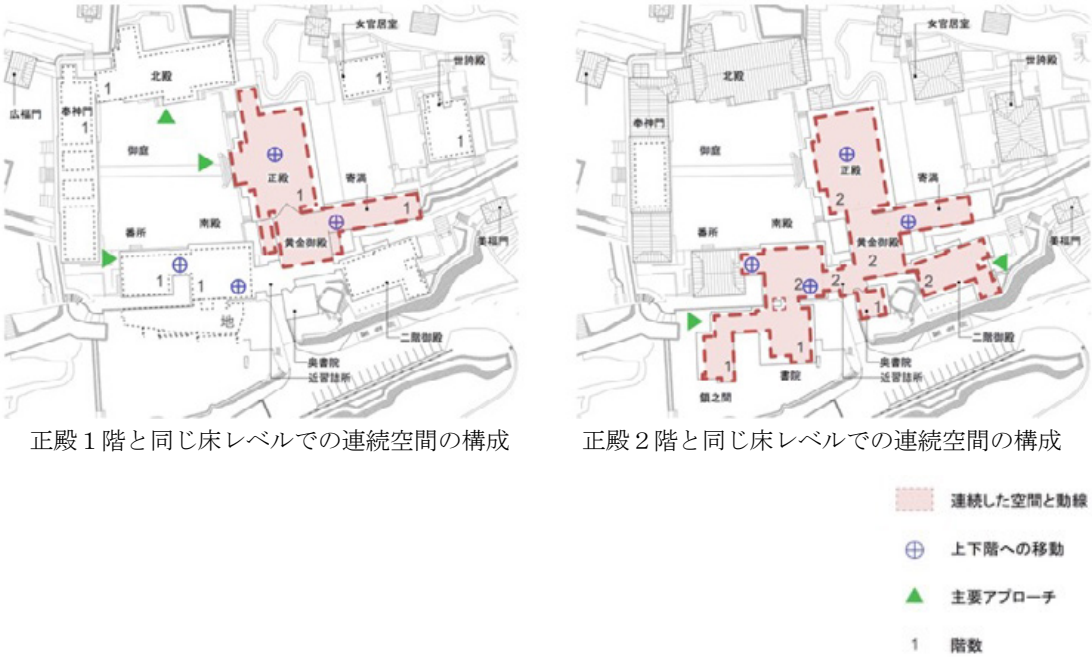


図 2.5：首里城公園の利用動線（国営沖縄記念公園首里城地区整備計画/平成 25 年 3 月沖縄美ら島財団提供資料を参考に作成）

正殿と１階レベル、２階レベルで連続している屋内空間及び階段の位置は下図のとおりである。正殿は１階レベルで黄金御殿・寄満と連続している。また、正殿は２階レベルで、黄金御殿・寄満・近習詰所・奥書院、二階御殿、南殿２階、書院・鎖之間の４棟と連続している。また、これらは災害時における各レベルでの水平方向の避難ルートとなっている。



正殿１階と同じ床レベルでの連続空間の構成　　正殿２階と同じ床レベルでの連続空間の構成

図 2.6：主要建築物群の内部動線（国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録／平成７年３月　沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所を参考に作成）

４）管理動線

消防車両・救急車両などの緊急車両は城郭内の中心部までは入れないため、下図のとおり城郭内を３つのゾーンに区分することで、緊急時の迅速な対応が想定されている。緊急車両のルートは、県立芸術大学から歓会門に至るルート、真珠道から木曳門前に至るルート、管理用道路から管理者用駐車場に至るルートが設定されている。

また、軽トラックなどの小型の管理用車両は木曳門から下之御庭まで入ることが可能である。

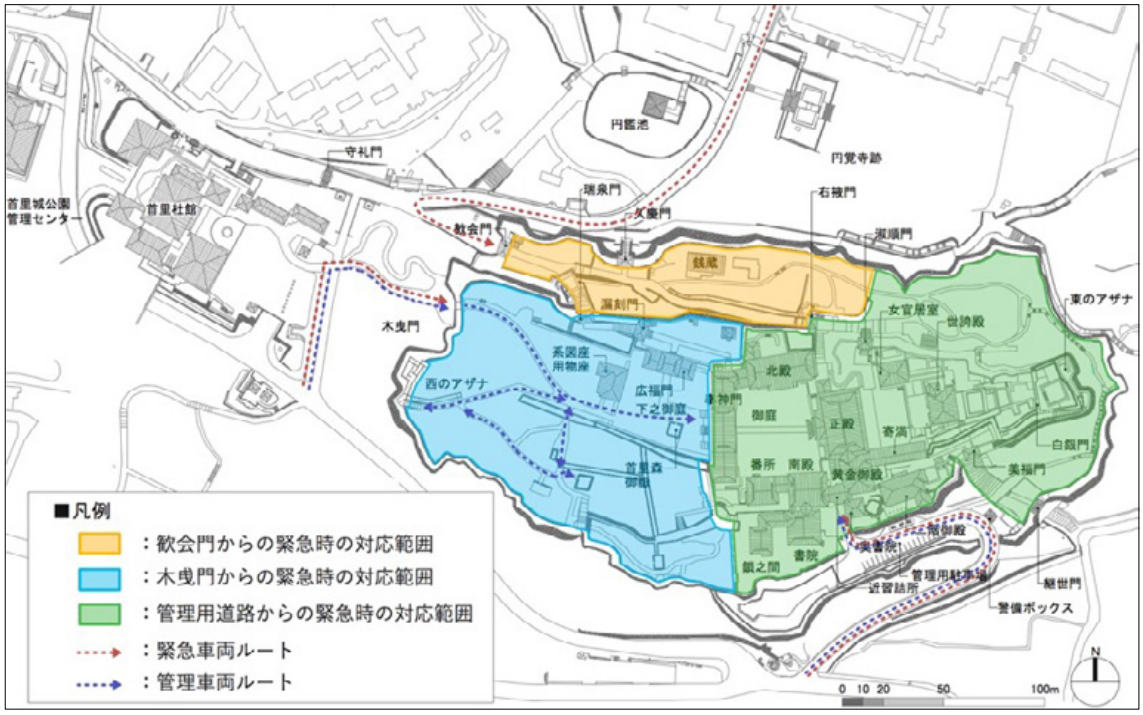


図 2.7：城郭内の管理動線

（国営沖縄記念公園首里城地区整備計画／平成 25 年 3 月　内閣府沖縄総合事務局　国営沖縄記念公園事務所を参考に作成）

（３）首里城公園及び公園内施設の利用状況

首里城公園及び公園内施設の利用状況として、開園・開場日時、利用者数、各種行催事、従業員数、展示物・収蔵品等の状況を整理し、表に示す。

１）城郭内の開園・開場日時（火災前）

城郭内区域の首里城火災前の国営公園区域の開園日時（無料区域）・開場日時（有料区域）は下表のとおりである。

開園・開場時間は通年を通し、開園時間 8:00、開場時間 8:30 だが、閉園・閉場時間は季節によって異なる。夏期は 20:30 まで、中間期は 19:30、冬期は 18:30 である。また休業日は原則として年に 2 日のみである。なお、城郭外区域（県営都市公園区域）は一年を通して 24 時間開放されている。

期間	開園時間	開場時間
4 月 1 日～6 月 30 日	8：00～19：30	8：30～19：00
7 月 1 日～9 月 30 日	8：00～20：30	8：30～20：00
10 月 1 日～11 月 30 日	8：00～19：30	8：30～19：00
12 月 1 日～3 月 31 日	8：00～18：30	8：30～18：00
休業日時		
7 月の第一水曜日とその翌日		

表 2.7：開園・開場日時と休業日時

（国営沖縄記念公園の公園施設［首里城公園の公園施設］平成 31 年度業務計画書／平成 31 年 1 月
一般財団法人沖縄美ら島財団　をもとに作成）

２）利用者数等

①国営公園の入園者数

国営公園全体の入園者数の推移を下図に示す。なお、入園者数は木曳門、歓会門、継世門の 3 か所でカウントしている。

年度別入園者数が最も多かったのは、平成 29 年度の 2,857,390 人（平均約 7,800 人/日）であり、月別入園者数が最も多かったのは、平成 29 年 11 月の 284,000 人（平均約 9,500 人/日）である。

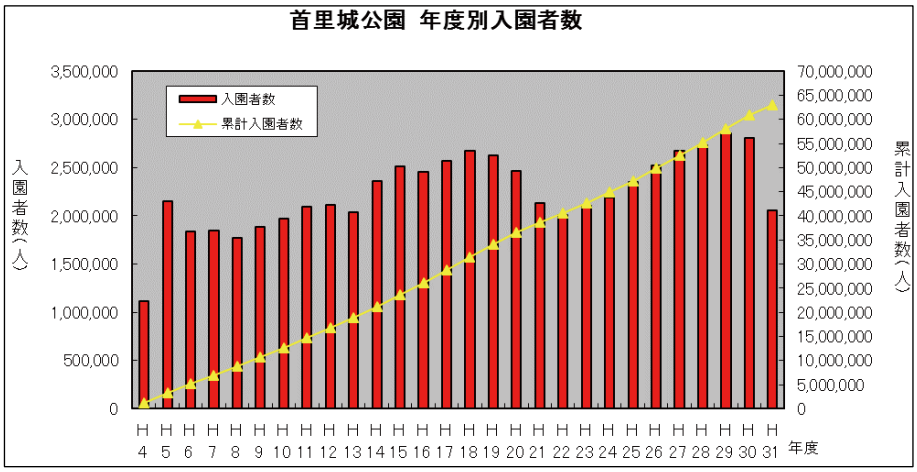


図 2.8：首里城公園　年度別入園者数　（内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 HP）

首里城地区　月別入園者数（平成 27 年度～平成 31 年度）　（約　万人）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
平成 27 年度	22.8	21.0	18.3	18.9	21.8	20.6	24.8	25.8	22.9	22.2	22.6	24.9
平成 28 年度	22.8	23.1	19.6	20.3	23.4	20.4	24.7	23.5	23.3	23.8	21.3	25.9
平成 29 年度	24.2	22.6	19.8	22.1	24.7	20.0	23.6	28.4	24.5	24.2	23.4	27.6
平成 30 年度	24.2	22.8	19.4	19.3	24.4	18.4	24.4	26.2	24.2	25.7	23.3	27.8
平成 31 年度	24.7	24.1	20.0	21.6	23.5	17.1	23.3	0	11.9	18.8	13.0	7.3

※令和元年 10 月 31 日～令和元年 12 月 11 日　臨時休園　※小数第 2 以下は切り捨て

表 2.8：首里城公園　月別入園者数　（内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 HP）

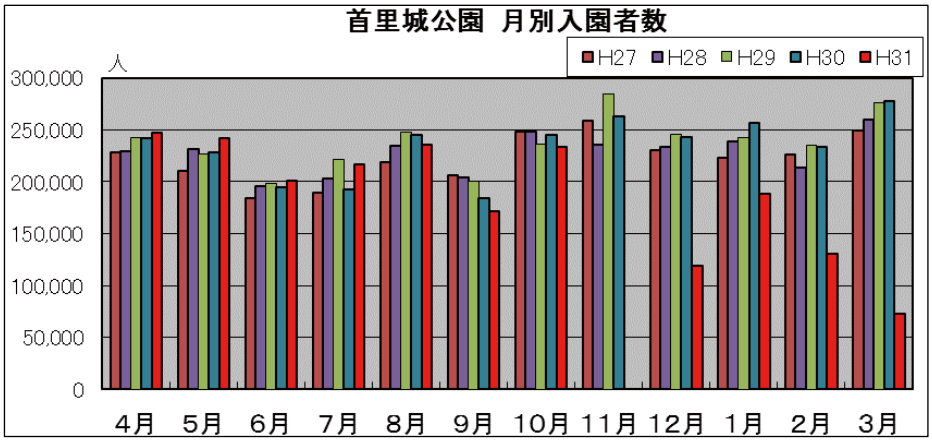


図 2.9：首里城公園　年度別入園者数　（内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 HP）

②城郭内有料区域の入場者数

城郭内有料区域の入場者の推移は下図のとおりである。なお、入場者数は奉神門の改札でカウントする。

月別入場者数が最も多かったのは、平成 31 年 3 月の 193,000 人（平均約 6,200 人/日）である。

首里城地区　月別入場者数（平成 27 年度～平成 31 年度）　（約　万人）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
平成 27 年度	16.2	15.1	12.4	11.8	15.0	13.5	18.2	18.9	16.7	15.5	15.4	18.3
平成 28 年度	16.2	15.6	13.0	12.5	15.5	13.7	17.5	18.1	16.9	16.2	14.4	18.4
平成 29 年度	16.5	14.3	12.3	11.8	14.4	11.7	15.2	19.1	17.0	15.5	15.0	18.1
平成 30 年度	15.5	13.3	11.7	10.8	14.2	10.8	16.1	18.5	17.0	15.1	14.9	19.3
平成 31 年度	17.4	17.2	13.2	13.2	15.9	11.2	16.7	0	0	0	0	0

※小数第 2 以下は切り捨て　　※令和元年 10 月 31 日～令和 2 年 3 月 31 日　臨時休場

表 2.9：首里城公園　月別入場者数　（内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 HP）

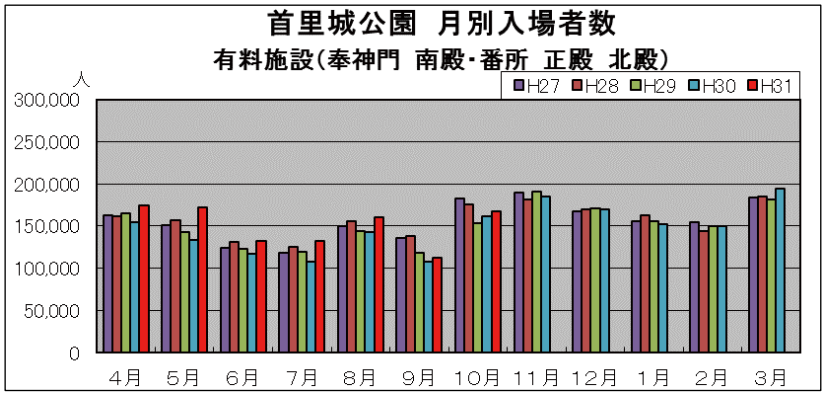


図 2.10：首里城公園　月別入場者数　（内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 HP）

③入園者数・入場者数の最多値

利用者数の最多値は以下のとおりである。令和元年の５月３日には１日の入園者数が約 15,000 人、同年５月４日に入場者数が約 11,000 人に達している。

	入園者数 （国営公園全体）	入場者数 （有料区域）
最多年	2,857,390 人 （H29 年度）	1,814,041 人 （H29 年度）
最多月	284,000 人 （H29.11）	193,699 人 （H31.3）
最多日	14,947 人 （R1.5.3）	11,359 人 （R1.5.4）
最多時間 （R1 の GW）		1,637 人 （R1.5.3 12:00～13:00）

表 2.10 入園者数・入場者数の最多値（内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 HP をもとに作成）

④入園者の属性

令和元年度の入園者に対するアンケート調査によると、来園者の内訳は県外日本人が最多で 58.4%、外国人もほぼ全体の 1/3 を占める。来園者の年齢層の偏りはない。来園者のグループ構成は親子連れが 43.6%と最多である。来園回数は「はじめて」が最多で 48.5%、滞在時間は１時間が最多で 51%、短い人も加えると約６割の人が１時間以内の滞在である。また、交通手段はレンタカー利用者が 57.1%と最多であり、自家用車を含めると約７割の人が駐車場を利用している。

再訪問の意向調査では、「再度来たい」が約４割で「機会があれば来たい」を含めると 99%となっている。

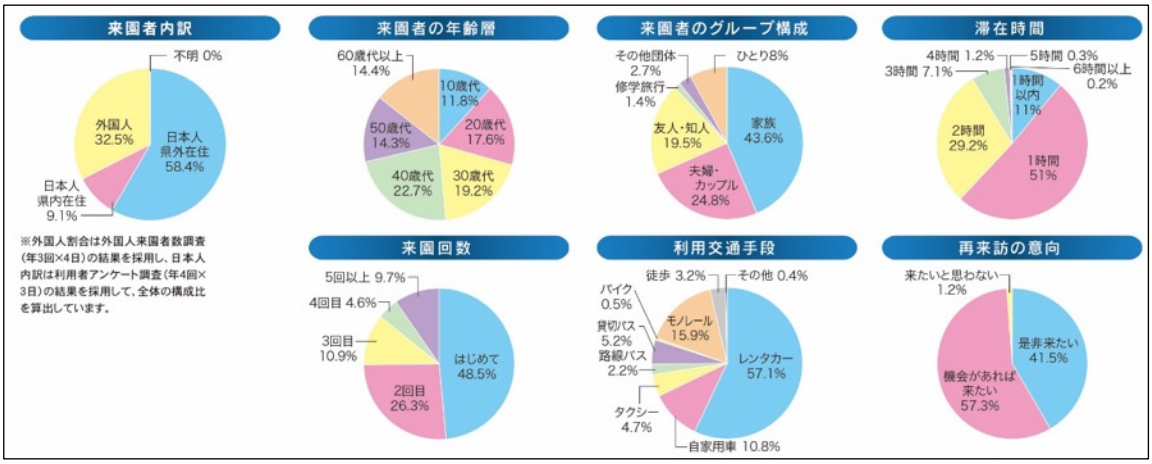


図 2.11：入園者の属性（令和２年度事業概要 国営沖縄記念公園 首里城地区 首里城公園）

３）各種行催事：定期的に行われるイベント

首里城公園では毎日実施する行催事や例年実施する季節の行催事など定期的に行われるイベントがあり、令和元年度の計画は下表のとおりである。令和元年度、最多の入場者を記録したイベントは、令和元年９月の中秋の宴であり、約 1,600 人が入場している。

No.	行催事	内容	実施頻度
1	御開門式	開館時の朝の儀式として銅鐘（どら）の合図と「御開門（うけーじょー）」の発声で奉神門を開門、併せて棒術も披露	毎日（1 日 1 回）
2	伝統芸能公演	世誇殿にて琉球舞踊や琉球古典音楽の演奏などを披露	毎日（1 日 3 回）
3	スタンプラリー	首里城公園全域を巡るスタンプラリー	毎日（随時）
4	御火鉢の御前拝礼の再現	正殿２階（おせんみこちゃ）にて礼拝の際に用いられたお香を焚くなど往時の儀式を再現	毎日（1 日 3 回）
5	東のアザナでの時報再現	琉球王国時代に行われていた時報の様子を再現	毎日（1 日 1 回） H31.4～実施
6	正殿デザインぬりえ	首里城正殿などの琉球独自の色の学習を目的としたぬりえの実施	毎日（H31.4.27～H31.5.6）

表 2.11：毎日実施する行催事（財団・沖縄県提供資料、首里城公園 HP をもとに作成）

No.	行催事	内容	実施月
1	朝拝殿規式（新春の宴）	琉球王国時代に行われていた正月儀式の再現	1 月
2	琉球の華みぐい	沖縄花のカーニバル期間にあわせた園内飾花等 ※沖縄観光コンベンションビューローと連携して実施	2 月～3 月
3	百人御物参	琉球王国時代に行われていた祭祀儀礼の再現	3 月
4	中秋の宴	琉球王国時代に行われていた冊封七宴のひとつである中秋の宴を再現	9 月
5	首里城祭	那覇市国際とおりでの琉球王朝絵巻行列の実施 ※沖縄県、那覇市と連携して実施	10 月～11 月
6	国王・王妃の出御	華やかな衣装をまとった国王・王妃の登場と衣装の解説	10 月
7	琉球王朝祭り首里古式行列	三ケ寺三詣行幸を再現した古式行列の実施 ※首里振興会と連携して実施	11 月
8	美御水取り（ヌービー）	首里王府の伝統行事として行われていた美御水奉納の再現 ※当蔵自治会ほかと連携して実施	12 月

表 2.12：季節の行催事（財団・沖縄県提供資料、首里城公園 HP をもとに作成）

写真 2.1：首里城祭（出典：報道写真集首里城）

４）スタッフの人数

首里城火災時（令和元年 10 月 30 日～10 月 31 日）に首里城公園に配置されていたスタッフの人数は、下表のとおりである。日中は城郭内に 78 名、城郭外に 104 名が勤務しており、沖縄美ら島財団の職員と常駐警備会社の警備員、設備会社の監視員、外部委託の清掃業者の従業員、及び外部委託の造園・園芸業者の従業員で構成される。夜間は城郭内外共に 4 名が従事し、監視員と警備員で構成されており、国・県・財団職員は不在となる。

時間	配置場所	従業員数
日中	城郭内	78 名（沖縄美ら島財団 26 名、警備 28 名、設備 5 名、清掃 19 名）
	城郭外	104 名（沖縄美ら島財団 76 名、警備 12 名、設備 3 名、清掃 7 名、造園等 6 名）
夜間	城郭内	4 名（警備 3 名、設備 1 名）
	城郭外	4 名（警備 3 名、設備 1 名）

表 2.13　首里城火災時（10/30～10/31）の配置人数（沖縄美ら島財団ヒアリング回答をもとに作成）

５）案内ガイドの実績

解説員 4 ～ 5 名で無料ガイドツアーを行っており、案内ガイドの実績は、平成 31 年 2 月～令和元年 10 月の 9 か月間（270 日）で、16,393 人（定時案内のみ。スポットを除く）である。平均すると 1,821 人/月、61 人/日を案内しており、1 回あたりの平均人数は 10 人である。

６）展示物・収蔵品等の状況（正殿のみ）

正殿内の展示物・収蔵品は下表のとおりである。火災によりすべてが焼失している。

場所		項目	数量
1 階	御差床左右の御床	絵画の掛け軸	2 点
	御差床北側	上御茶之間飾	一式
2 階	御差床上	御書扁額	3 点
	御差床	国王の椅子	1 点
	唐玻豊之間	御轎椅（椅子）	1 点
	北側の展示ケース	玉冠	1 点
		国王印	2 点
	西之みこちゃ	正殿構造模型	1 点

表 2.14：正殿の展示物と収蔵品（沖縄美ら島財団提供資料　収蔵品状況報告資料　をもとに作成）

扁額：中山世土（ちゅうざんせいど）

国王椅子（こくおういす）

写真 2.2：正殿の展示物と収蔵品（出典：沖縄美ら島財団提供資料　収蔵品状況報告資料）

2-２．首里城公園の立地及び敷地特性並びに建築物の特性

（１）風速と風向

風速と風向は、火災時の延焼拡大に大きな影響を及ぼす気象条件である。火災時は強風によって火勢が増すため、強風による火災拡大のリスクにも十分な注意が必要である。

気象庁の統計データ（1981～2010 年）によると、那覇市の年間平均風速は 5.9m/s であり、東京 2.9 m/s、大阪 2.6 m/s、福岡 3.1 m/s、鹿児島 3.4 m/s と比較して強い。また、首里城公園は標高 127m（御庭）の高台に立地しているため風速が大きくなりがちであり、さらに局地的な強風が吹くことが多く、延焼防止の観点からは厳しい立地条件といえる。

また、同データによる月ごとの風向は下図のとおり、春・夏は南東風、秋・冬は北北東風が多い。火災当日(秋)の風向は北北東だったが、正殿を守る視点では、春・夏は建築物が密集している正殿南側からの風に注意する必要がある。

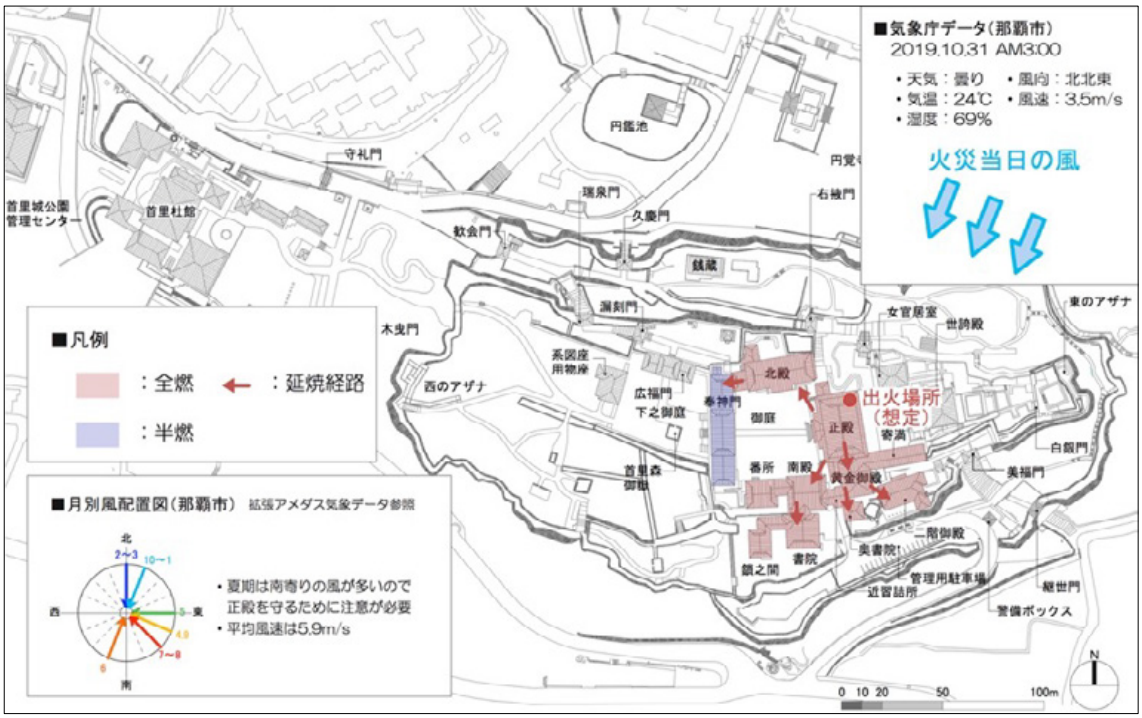


図 2.12：風向きと延焼経路（気象庁 HP・自立循環型住宅 HP を参考に作成）

（２）周辺市街地の状況

首里城公園周辺の緩やかな丘陵地は低層の戸建て住宅が集まるエリアであり、県道 29、40 号周辺を除いて、都市計画法上の用途地域は第一種低層住居専用地域であり、防火指定はない。

第一種低層住居専用地域は、低層住宅に係る良好な住居の環境を保護するために定める地域であるが、住宅が密集している場合、震災時や火災発生時には延焼被害のおそれがある。特に金城町、大中町、赤田町、崎山町などは首里城の城下町として歴史的な遺産や道路の形態などの昔ながらの集落環境を保全している。地域の主要な生活サービス道路は幅員 7m 前後の赤田寒川線や崎山８号線であるが、地域内には消防車の通行が困難な幅員 4m 未満の道路も存在している。

首里城公園は高台に存在するとはいえ、強風時、周辺地域における火災からの飛び火がないとは言えない。春・夏は南東の季節風が多いため、首里当蔵町、赤田町、崎山町からの飛び火、秋・冬は北東の季節風が多いため、当蔵町からの飛び火に対しても注意が必要である。

「那覇市都市計画マスタープラン地域別まちづくり方針（４）首里地域」には「首里城をはじめとした観光スポットに多くの観光客が訪れる地域でもあり、災害時に観光客がスムーズに避難できるよう、地域住民や事業者の協力により、安全に避難できる仕組みづくりを進めます。」と記載がある。また、首里城が存する那覇市首里地区は、地域の青年会や自治会が中心になって旗頭や獅子舞等の伝統文化を継承し活動しており、伝統文化を通じての地域活動が盛んである。

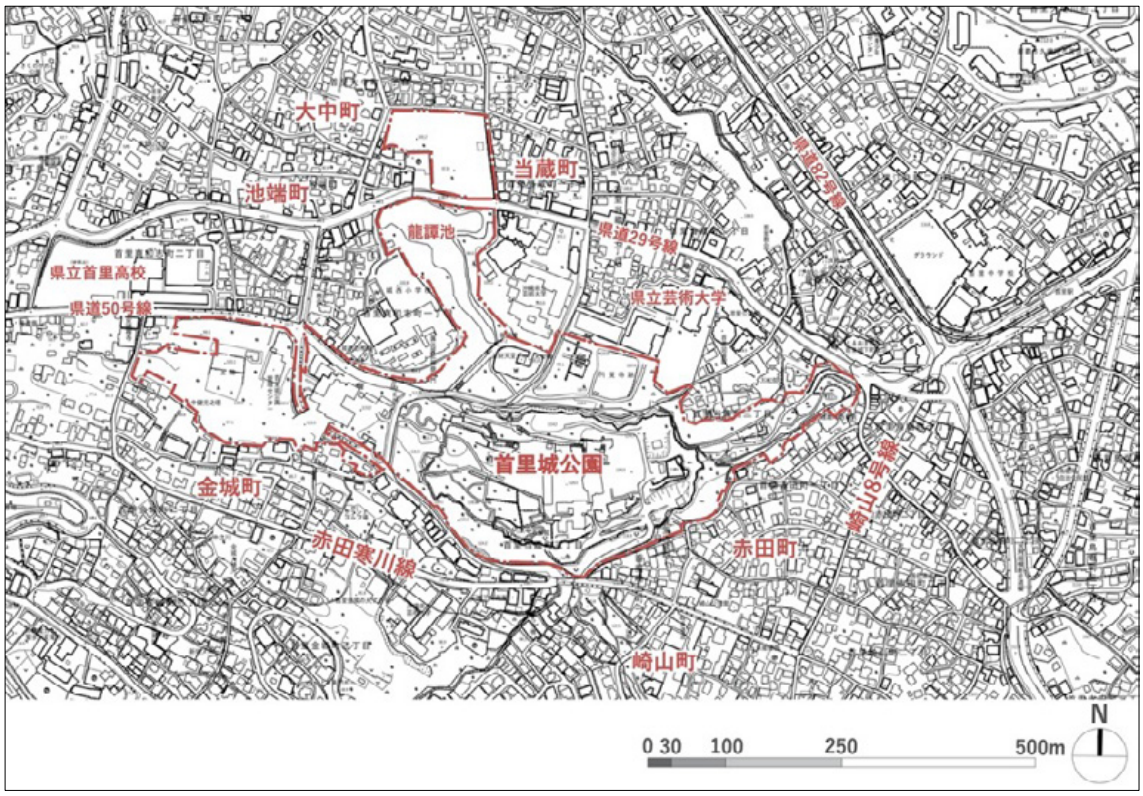


図 2.13：首里城の周辺市街地

（３）地形・城郭・建築物の配置

城郭内の建築物の火災に対する特性を、高台への立地、消防活動を阻む要因（高低差・城郭・門等）、建築物の配置の３つの視点から整理分析し、注意すべき特性として捉えた。

１）高台への立地

首里城公園は那覇市東部の緩やかな丘陵地にあり、標高約 127m（御庭）の高台に位置する。城郭内外で南側（御庭～継世門）7m、北側（御庭～久慶門）23m、西側（御庭～守礼門）16m の高低差があり、城郭内は周囲に比べて特に高くなっているため、局地的な強風が吹くことが多い。

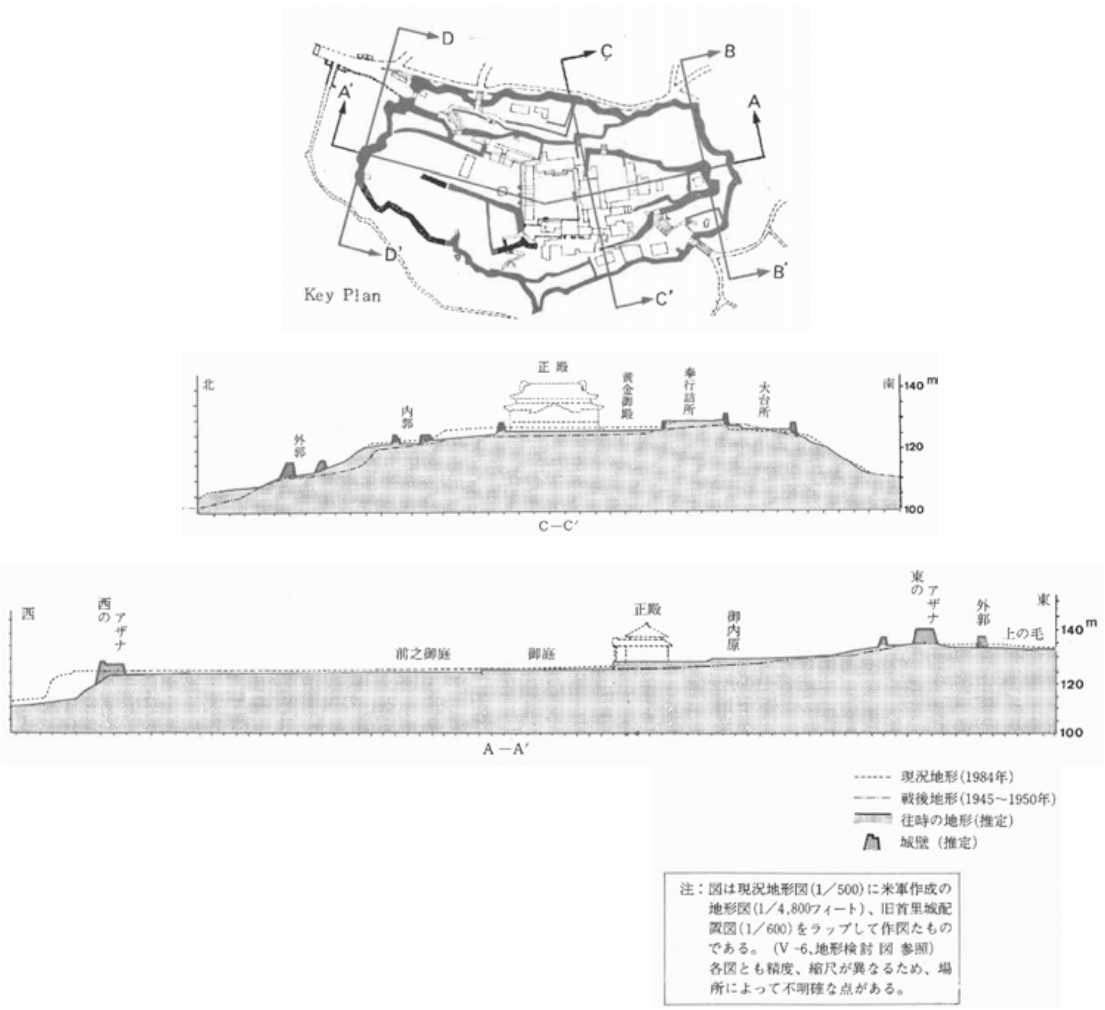


図 2.14：敷地の高低差（出典：国営沖縄記念公園首里城地区基本計画／昭和 62 年／沖縄総合事務局開発建設部）

２）消防活動を阻む要因（敷地の高低差・城郭・門等）

城郭内の中心部は、復元された門、階段、狭あいな通路などが障害となり消防車両が入れない構造となっていた。

また、消防車両の部署する位置に対して消火活動を行う位置が高い場所にあるため、消防隊員の移動やホースなどの運搬の障害となる可能性がある。例えば久慶門から御庭までの高低差は23m あり、一般的な建築物では 6～7 階レベルに相当する。

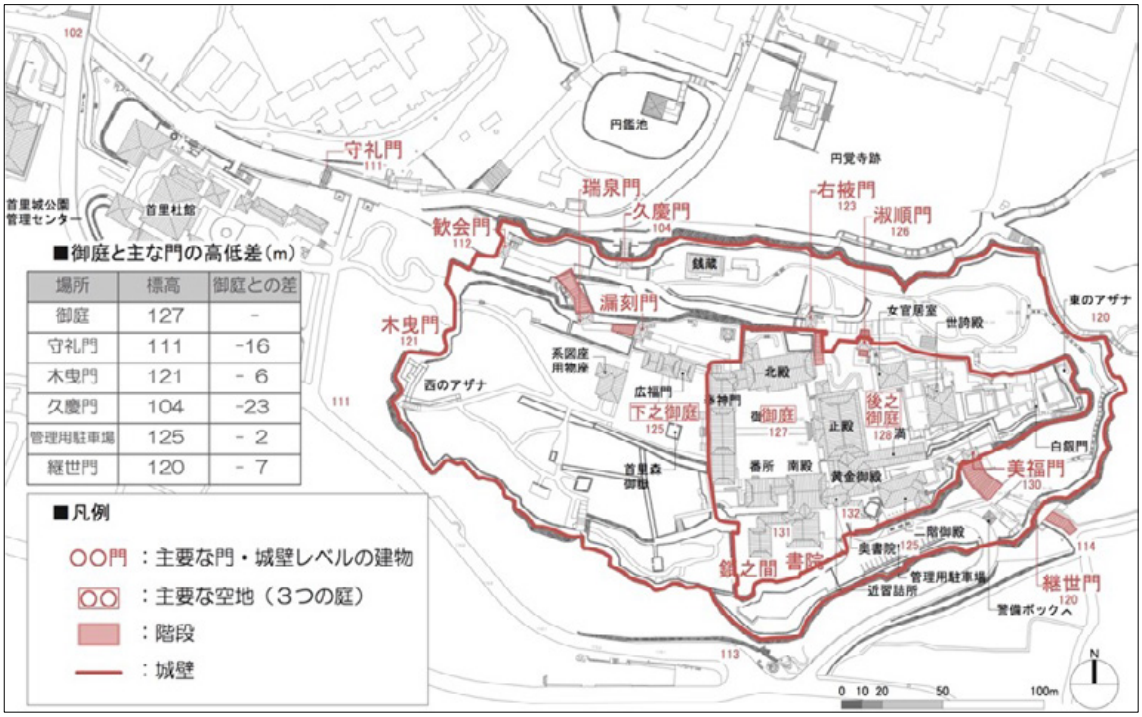


図 2.15：敷地の高低差と門

継世門、美福門は、安全管理の観点から一般利用動線に含まれていなかったため、日中・夜間ともに施錠されていた。その他の門扉のある門は夜間のみ施錠されていた。

消防隊の動線上では木曳門、久慶門、奉神門、美福門が施錠されており、守礼門、木曳門、久慶門の手前には車止めも設置されていた。これらは防犯上有効だが、夜間の円滑な消防活動を阻む要因の一つといえる。

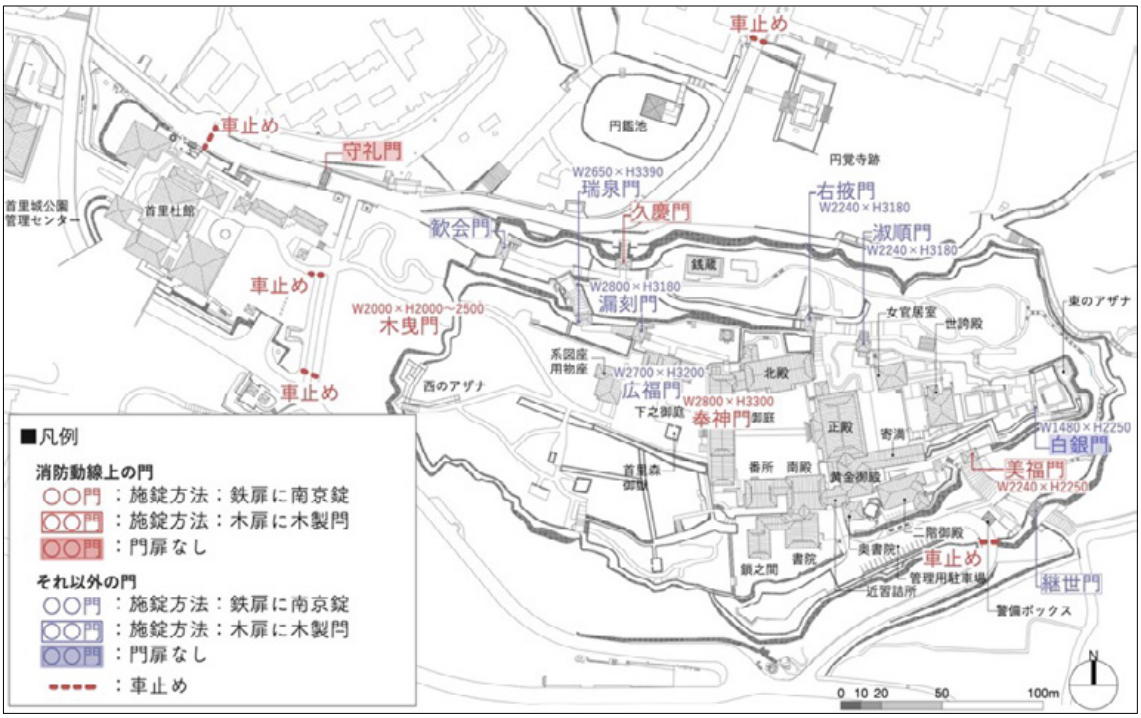


図 2.16：門と車止め

今回の首里城火災では消防隊が部署位置から久慶門、美福門の木製の扉を破壊して進入した。また、県立芸術大学前の車止めが消防車両の動線上にあったため、消防隊が南京錠を破壊した。

図 2.17：消防活動動線（消防活動報告書／令和元年 11 月 22 日　那覇市消防局　を参考に作成）

３）建築物の配置（隣棟間隔／屋根のつながり／建築物密集化のプロセス）

隣棟間隔が狭いと延焼拡大の危険性が高いだけでなく、火災が発生した建築物周囲の状況を確認しにくく、消防動線や消防活動スペースが限定されるなど円滑な消防活動を阻む要因になる。

正殿１階レベルの隣棟間隔（外壁芯々距離）は、正殿と黄金御殿・寄満・近習詰所・奥書院間が約 1.5m、正殿と北殿間が約 4.1m、北殿と奉神門間が約 2.3m、正殿南之廊下と南殿・番所間が約 4.8m であった。

正殿２階レベルの隣棟間隔（外壁芯々距離）は、正殿と黄金御殿・寄満・近習詰所・奥書院間が約 1.5m、南殿・番所と書院・鎖之間間が約 3.6m、黄金御殿・寄満・近習詰所・奥書院と二階御殿間が約 3.5mであった。

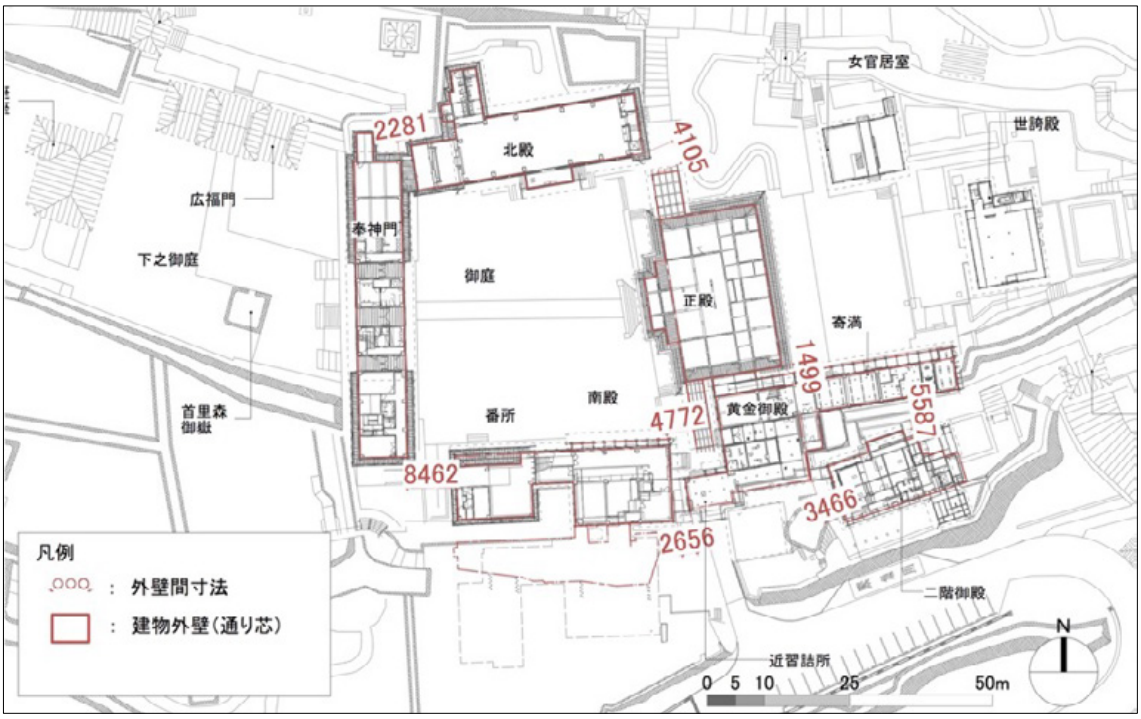


図 2.18：建築物の隣棟間隔/正殿１階レベル（外壁芯々距離）

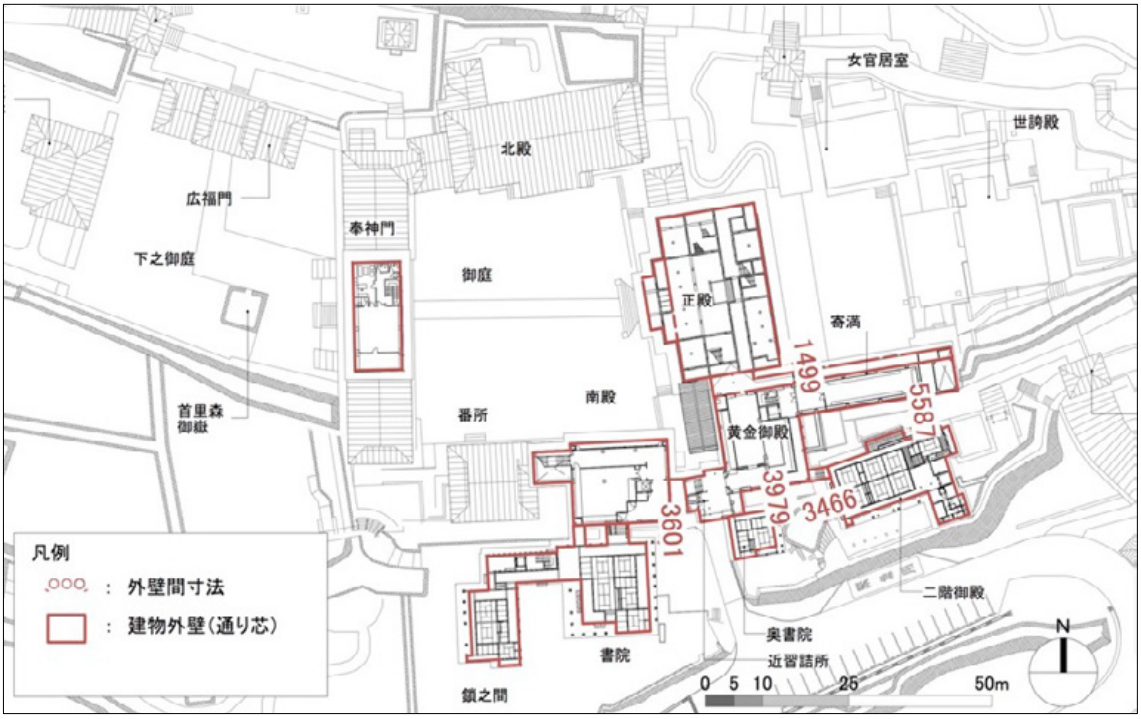


図 2.19：建築物の隣棟間隔/正殿２階レベル（外壁芯々距離）

正殿と黄金御殿・寄満・近習詰所・奥書院、二階御殿、南殿・番所、書院・鎖之間の５棟は、黄金御殿等の建築により屋根や軒が連続することになったため、平成 25 年に消防法上、一棟とみなされることになった。屋根が連続した５棟の延べ面積は約 4,150 ㎡であり、つながった軒等が延焼経路となった場合、今回の火災のように延焼範囲が大きくなる危険性がある。

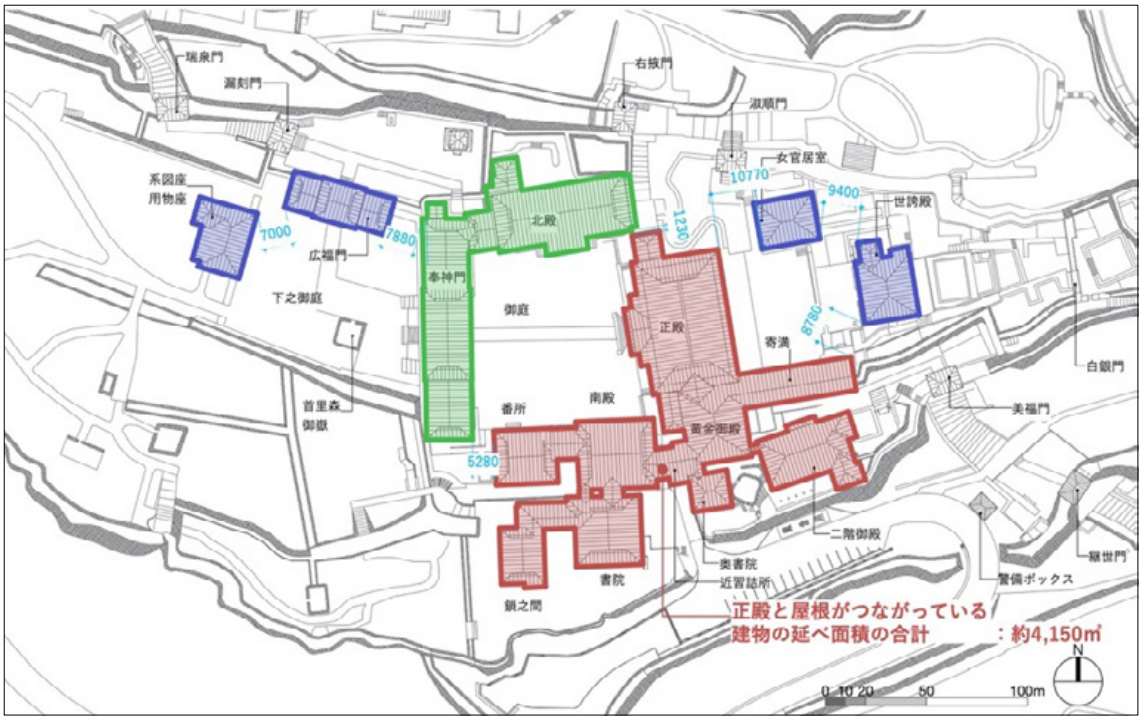


図 2.20：屋根のつながり

平成４年（1992 年）に竣工した正殿他、御庭ゾーンの３棟の建築物と広福門やその他の門に加えて、平成 12 年～22 年（2000～2010 年）には正殿のまわりに書院・鎖之間と二階御殿を復元し、さらに平成 26 年（2014 年）に黄金御殿・寄満・近習詰所・奥書院を復元した結果、上記のとおり正殿を含む５棟の建築物の屋根が連続することになった。

この段階で、管理用駐車場から御庭に緊急車両が入れなくなっただけでなく、正殿南側に建築物が密集し、前述のように隣棟間隔が狭くなった。

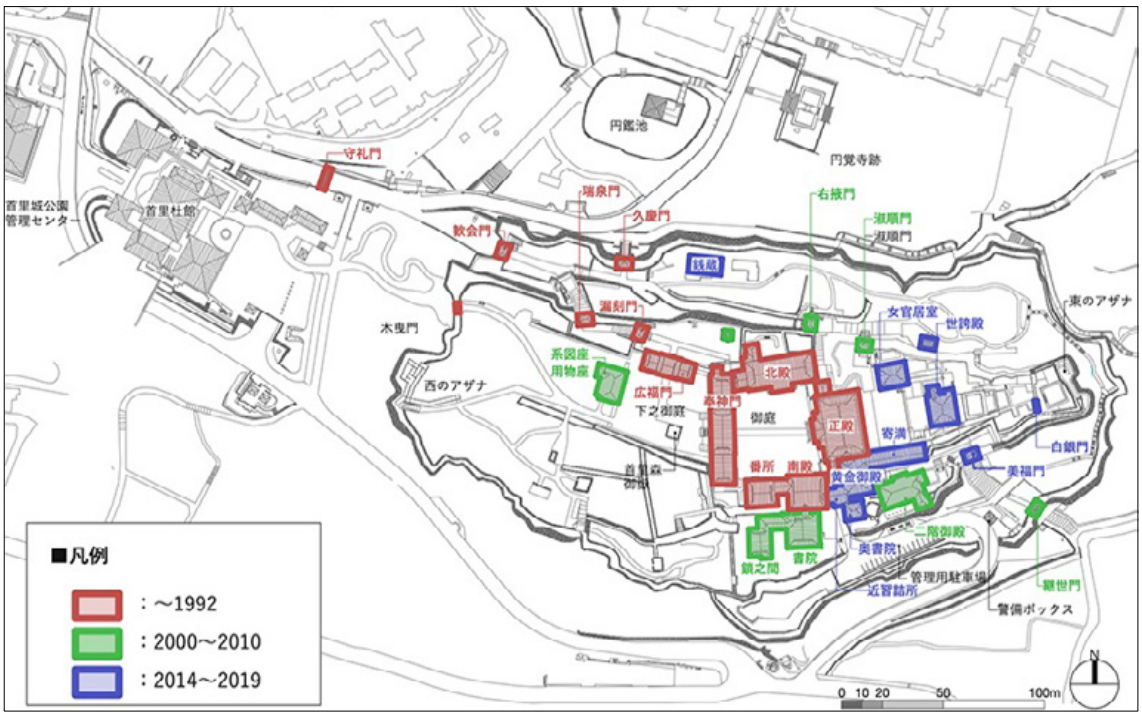


図 2.21：建築物密集化のプロセス

● 平成４年（1992 年）開園時の整備状況

■凡例
①：正殿
②：北殿
③：南殿・番所
④：奉神門
⑤：広福門

写真 2.3：開園時の整備状況
（出典：国営沖縄記念公園首里城地区建設の記録／H6.3／沖縄開発庁沖縄総合事務局）

● 平成 12～22 年（2000～2010 年）の整備状況

■凡例
⑥：二階御殿/2000 年
⑦：系図座・用物座/2000 年
⑧：書院・鎖之間 2007 年/

写真 2.4：2010 年の整備状況
（出典：国土地理院空中写真 2010 年）

● 平成 26～31 年（2014～2019 年）の整備状況

■凡例
⑨：黄金御殿・寄満・近習詰所・奥書院　/2014 年
⑩：女官居室/2019 年
⑪：世誇殿　/2019 年

写真 2.5：2020 年の整備状況
（出典：google）

（４）建築物の防耐火性能

建築物の防耐火性能の確認として、各建築物単体の防耐火性能と、建築物の集合体としての隣棟間の延焼防止性能・防耐火区画について調査、整理し、その内容を示す。

１）建築物単体の防耐火性能

城郭内の 11 棟の建築物のうち、木造が 3 棟（正殿、世誇殿、系図座・用物座）、鉄筋コンクリート造が 3 棟（北殿、南殿・番所、奉神門）、木造と鉄筋コンクリート造の混構造が 4 棟（書院・鎖之間、黄金御殿・寄満・近習詰所・奥書院、二階御殿、広福門）、鉄骨造が 1 棟（女官居室）であった。

正殿は木造 3 階建ての建築物であり、国内の城の現存する天守や櫓等とは異なり、防火効果のある土壁や漆喰塗り仕上げが採用されておらず、構造体だけでなく、外壁、軒裏、内部の床・壁・天井も木材であるため、一旦出火すると短時間で急激な延焼拡大に至る可能性がある。また、天井高が比較的低く、かつ天井仕上げが木材である部屋も存在するため、そのような部屋で出火した場合、すぐに天井に着火して火が燃え広がりやすく、防火区画のない階段を通って上階へ急速に延焼拡大するおそれがある。

また、木造以外の建築物であっても、外壁や軒は木材であり、小屋組等に木材が大量に使用されており、開口部が建築基準法上の防火設備でない部分が多い等、延焼が拡大しやすい要因が多いといった特性があった。

２）外壁の構造・防火区画・防火設備の状況

各建築物の鉄筋コンクリート造の外壁、建築基準法上の防火区画となっていた間仕切り壁、建築基準法上の防火設備の位置は下図のとおりである。

各建築物の外壁の多くには、外観復元のために鉄筋コンクリート造の外壁の上に板貼りとなっていた。

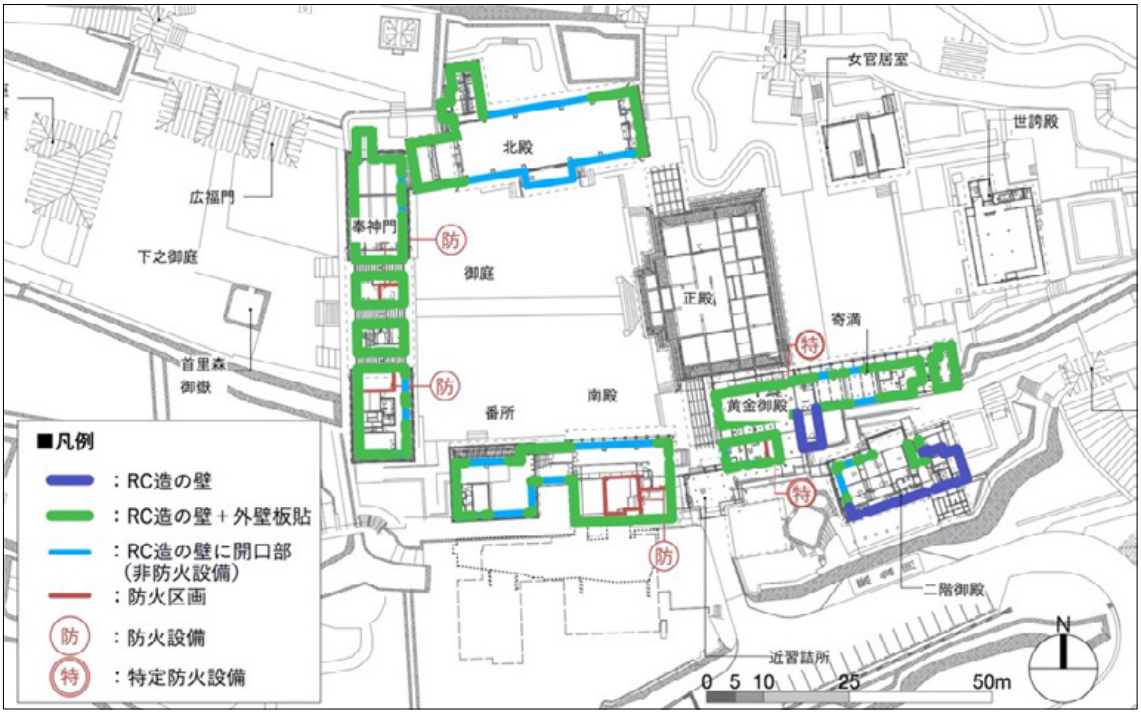


図 2.22：外壁の構造・防火区画・防火設備の状況/正殿１階レベル（沖縄美ら島財団提供　各建築物竣工図をもとに作成）

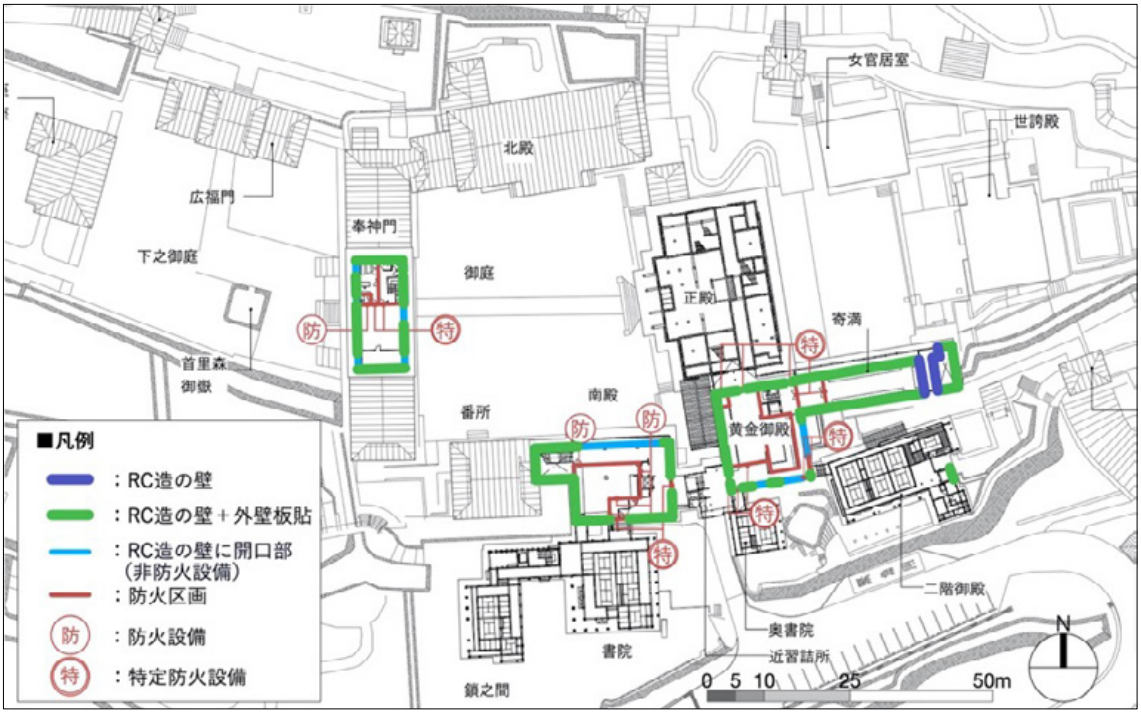


図 2.23：外壁の構造・防火区画・防火設備の状況/正殿２階レベル（沖縄美ら島財団提供　各建築物竣工図をもとに作成）

（５）立地及び敷地特性と正殿を含む各建築物の特性のまとめ

以上のことから、正殿を含めた首里城公園内の建築物は一旦出火し、初期消火に失敗すると火災が急速に広がるリスクを有しており、消防活動にも困難を伴うといった特徴を有しており、火災に対して非常に脆弱な面があったといえる。

首里城公園は那覇市内の高台に立地し、周辺は込み入った住宅地が広がっている。

公園敷地内は城郭内へ向かって勾配があり、城郭は高く積み上げられた石積みの城壁でできており、バリアフリー対応のスロープを除き城郭や城郭内部に多数の門や階段等があり、御庭などの城郭内の中央部へは消防車両等が進入できない構造である。特に正殿と城郭外側敷地の高低差は最大で約 23m と大きく、城郭内や国営有料区域に入るための階段は急勾配である。

また、高台のため局所的な強風が吹くことが多く、急激な延焼拡大につながりやすい。

城郭内には 11 棟の建築物が存在した。正殿の南側は、正殿を含む５棟の屋根が連続し、隣接する建築物との間隔は狭く、特に城郭内南側は建築物が密集していた。

これらの立地・敷地特性、建築物の配置状況は、延焼拡大の危険が大きいというだけでなく、消防車両等が城郭内の中央部へ進入できず、また消火栓からの距離が長い等、消防活動の上では厳しい条件である。

また、正殿は木造３階建ての建築物であり、国内の城の現存する天守や櫓等とは異なり、防火効果のある土壁や漆喰塗り仕上げが採用されておらず、構造体だけでなく、外壁、軒裏、内部の床・壁・天井も木材であるため、一旦出火すると短時間で急激な延焼拡大に至る可能性がある。また、天井高が比較的低く、かつ天井仕上げが木材の部屋が多くあり、そのような部屋で出火した場合、すぐに天井に着火して火が燃え広がりやすく、防火区画のない階段を通って上階へ急速に延焼拡大するおそれがある。

一方、城郭内の正殿以外の 10 棟の建築物のうち、２棟は木造、３棟は鉄筋コンクリート造、４棟は木造と鉄筋コンクリート造の混構造、１棟は鉄骨造であるが、鉄筋コンクリート造の建築物であっても、外壁、軒裏、小屋組等に木材が大量に使用されており、開口部が建築基準法上の防火設備でない部分が多い等、延焼が拡大しやすい要因が多いといった特性があった。

特性	内容
①城郭内の立地特性	・那覇市内の高台に立地している ・周辺は込み入った住宅地が広がっている ・公園敷地内は城郭内へ向かって勾配がある ・正殿と城郭外側敷地の高低差は最大約 23m である ・正殿へ至るまでに急勾配の階段や多数の門が存在する ・高台のため局所的な強風が吹くことが多い
②城郭内の建築物の配置特性	・隣接する建築物との間隔が狭く、建築物が密集していた ・正殿を含む５棟の屋根が連続していた
③正殿の建築物の特性	・土壁や漆喰等（防火性のある材料）がない木造３階建ての建築物である ・外壁、軒裏、内部の床・壁・天井も木材でできている（全て可燃物） ・天井高が比較的低く、かつ天井仕上げが木材となっている部屋が多い ・階段に防火区画がないため上階へ急速に延焼拡大するおそれがある ・一旦出火すると短時間で急激な延焼拡大を及ぼす可能性がある
④北殿、南殿・番所等の建築物の特性	・北殿、南殿・番所などは外観復元のため RC 造でも外壁、軒裏、小屋組等に木材が大量に使用されている ・開口部が建築基準法上の防火設備ではない部分が多い

表 2.15：立地と各建築物の特性